

テニスの ‘The Two Voices’

—— その懷疑と信仰 ——

山 田 泰 司

ヴィクトリア朝文学は際立つて思想の文学であつた。この場合思想というのは、形而上的哲学ないし宗教の思想のことではなくて、日々の生活を営む上での、人間の生き方と密接にからみ合つた思想のことである。ことばを少しくかえるならば、それは *message* の文学であつた、といつてもよい。この時代に世人の啓蒙警告に大いに活躍した論客たち、Newman、Carlyle、Ruskin、Arnold、Mill、Huxley たちをあげれば、これは容易にうなずけるであろう。代表的小説家、例えば Dickens、Thackeray、George Eliot、Gaskell など、も当時は半ばその顕著な時局性の故に読まれたのであつた。

ヴィクトリア朝文学のこうした特質は、文学の最も純粋なものとされている詩歌にも及ばずには済まされなかつた。テニスの *In Memoriam* (1850) は初版五千部を僅か数週間で売りつくし、数箇月のうちに六万部が刊行されたといわれているが、これはこの長詩が技巧上優れていたばかりでなく、内容が当時の知識人の知的渴望に応えるものであつたことを物語る。

テニスは芸術的傾向からいえば、恐らく Keats の衣鉢を継ぐ詩人であり Keats ぶりの詩を安んじて書くことを許される時代環境に生れ合せたならば、自分の築いた芸術の殿堂に香をたき、美しい夢を編みながら、抽象美の使徒として一生を終えたことであろう。しかし時代は彼に自分の殻から出て、当時の思想問題と取組むことを要求した。例えば John Stuart Mill は 1835年、*London Review* 誌上で、「芸術の殿堂」(‘The Palace of Art’) を含むテニスの初期の詩集 *Poems Chiefly Lyrical* (1830) および 1833年の *Poems* を批評した文章の中で

「彼（テニスン）の詩的資性に、重要な真理に対する深い感動をあたえる手段をそえるためには、彼はたえず精進熟考することにより、かゝる真理を識別するための知性を強靱にせねばならぬ。彼は、人生および世界についての自己の理論が、頭脳の妄想にあらずして、充実、円熟せる思考の、十分根拠ある成果となるよう心掛けねばならぬ——即ち、彼は心を専らにして、詩と⁽¹⁾共に哲学をも修めねばならぬ。」

と述べて、当時26才の詩人に、哲学者としての立場から、教えを垂れている。そして事実、以後60年の詩作生活において、詩と哲学とをいかに融合させて行くかが、テニスンの課題となるのである。しかし、言うまでもないことであるが、こゝで哲学というのは体系的形而上学のことではない。合理主義、福音主義、功利主義、オックスフォード運動、キリスト教社会主義、実利主義、救世軍、不可知論など、種々雑多な思想が入り乱れて混沌たる様相を呈したヴィクトリア朝社会に真摯な詩人としていかに処するか、要するに具体的な生き方の問題と取組むことである。したがつて、これは詩人と社会の問題と置きかえても差支えないであろう。

およそ詩人というものは、その主題として自分の現に生きている社会の事象を、生のまま取上げるに及ばないことは、もちろんである。彼は、もし望むなら、また必要とあらば、社会に対する自己の考えの表白を、遠い神話の世界に或いは自ら織りなす象徴の世界に求め、自己懺悔を試みることができる。しかし詩人として完からんためには彼は、自分の生きる時代に背を向けてしまつてはならないのである。不思議なことに、自分の生きている社会が含蓄するところのものを、ひしひしと感得することができない詩人は、自分の時代の後までも長く生き残ることができない。恐らく、自分が現に生きている時代を把握し得なければ——それは中途半端な生き方を意味する——遂に人間性の何たるかを理解し得ないことになり、詩人としての本質的条件に欠けることになるからであろう。この小論で問題としたのは、芸術の殿堂を出て、自らを時代の渦の中に巻きこんだ、ヴィクトリア朝知識人としてのテニスンの一面である。私はこれを、注目すべき初期の一篇の中に探りたい。

さて、取上げていささか論じようと思う ‘The Two Voices’ と題する一篇は、1842年の詩集（二巻）に発表されたものである。この詩集は、さきの1830年および1833年の詩集の基調をなしている、美しいがものうい気分情調を脱して、思想家としてのテニソンの萌芽を示す数篇の思索詩（speculative verse or poetry of ideas）を含むという意味で重要である。彼がこの種の詩を書くに至った動機には色々考えられよう。それは、1833年の詩集中の白眉 ‘The Palace of Art’ において、極めてかすかではあるがすでに見られるように、芸術のための芸術に沈潜し、生きた人生の問題から逃避することの危険に自ら気付いたためでもあろうし、前に引用した Mill のあたえたごとき忠告に応えるためでもあつたろうし、或いはケムブリッジ時代の良友たちから受けた多くの知的刺激の故でもあつたろう。しかし思想が芸術的表現を得るためにはこれを現象として外側から描いては駄目なのであつて、詩人に自己の魂の問題として受けとめられ、一たん情熱のふいごを通らねばならない。その意味で、以上の動機よりも決定的であつたと考えられるのは、1833年9月15日、ケムブリッジの秀才にして、テニソンの無二の親友、彼の詩のよき理解者、妹エミリの結約者 Arthur Henry Hallam (1811—33) を、突如ウイーンに失つたことである。この打撃がテニソンにとつていかに堪えがたいものであつたかはテニソンの孫にあたる Charles Tennyson が、こう記している。

「悲嘆にくれた最初の数箇月というもの、幾たびか暗澹たる意気消沈の波が彼（テニソン）をおそい、彼はしばしば死にあこがれた。人を愛する限りない能力を具え、華々しい将来を約束されていた友の急死は、生きんとする彼の意志の根底までゆさぶつた。この偉大な精神的宝が絶滅する、人間的愛のすべて、人間の精神的努力のすべては永遠なる海原の上の、束の間のさざなみに過ぎないとは。そんなことが一体あり得るのだろうか。宇宙は全く無目的で、人間は自然の巨大な力にもてあそばされる頼りない玩具なのであろうか。もし、そうとすれば、人生にいかなる価値があり得よう。神を呪い、生を絶つ以外に何が残されてい⁽²⁾よう。」

この引用にみられるような精神的危機を契機として、テニソンは、彼にその後

一生付きまとうことになった問題、靈魂は不滅なりや、人間の意志は自由なりや、宇宙を導く神意ありや、といった恐らくはラショナルな解答不能の問題に真剣に取り組むことになるのであるが、これは当時の知識人がひとしく頭を悩ました問題でもあつた。

‘The Two Voices’は1833年及びその翌年の間に作られたことになっているから、親友 Hallamの 死の陰の下に書かれたことは明らかである。同じ頃 ‘Ulysses’も書かれた。これがギリシア伝説の武將にこと寄せて、友の死を越えて進まんとするテニソンの決意のほどを、かなり客観化して歌い上げたものとすれば、前者は一人称 “I” を用いて、生くべきか死すべきかのハムレット的苦悩を主観的に、あらわに描きだしてみせたものといえる。内容からいえばテニソン一代の傑作 *In Memoriam* の主題を直截に予表するものとして見逃すことのできない作である。形式は弱強四歩格 (iambic tetrameter) で、三行ずつ韻を踏んで一スタンザを成し、合計462行、彼がそれまでに書いた詩の中では、最も長いものである。

形式と内容とを切離して考えることの危険な詩について、梗概を記すことは無意味に近いが、論を進める都合上、この詩のあらましを述べておきたい。

こゝに一人の若者がいる。彼は自分の将来の幸福に絶望し、自殺への誘惑にかられている。彼の絶望は、か細い一つの声という形をとり、それは彼に宇宙、時間、知識の無限に対比して、人間の卑小、人間の生命のはかなさを指摘する。それは、また、若き日の希望などは、血の躍動にすぎぬ、殉教者の不滅の望みすら、生来の多血質の作用にすぎぬ、安らぎをあたえ得るのは墓のみ、人生はよしなし事の連続だ、と若者を説得しようとする。これに対しては若者は、順を追うて、人生には単に感覚のみが証明する以上のものがあるという彼の強い確信、または「忘れられたる夢の一瞥に似た」靈魂不滅の暗示などを例にあげて、この絶望の声に反駁する。それでも絶望の声に打ち勝つことができず、しかし死は自分の渴望に対する答えにはならず、自分は生命にこそあこがれるのだと感じながら、惨めな気持ちで闇の中に坐つてゐるうちに、何時か安息日の空が白む。窓を開けて外を眺めると、目に映るの

はいそいと教会へ向う人々。一家庭の幸福そうなさまは、この若者に新たな希望を注ぎこむ。別の声が彼の耳もとで信仰をささやく。生氣ある春の野に出ると、彼の希望は更に強められる。

大体、上のごとくであるが、こゝでは若き日のテニスの懷疑と信仰に重点を置きつつ、この詩の含む幾つかの面に光を当ててみたい。

まず、タイトルであるが「二つの声」とは何を指すのであろうか。この詩では対話の形式で三つのものが口をきいている。即ち第一行で「静かな細い声」(“a still small voice”)とあり、第426行では「さえない苦々しい声」(“the dull and bitter voice”)とあるのが一つであり、二番目には、この声にしきりに論駁を加える「私」(“I”)なる人物であり、もう一つは第427行で誘惑の声が聞えなくなつたとき、銀鈴のようなささやきで「私」を慰めてくれる「別の声」である。詩人が「二つの声」というタイトルで指しているのは、「私」を除いたほかの二つの声であること明らかである。では「私」とは何を指すのであろうか。これは次第に明らかになつて行くであらう。

「静かな細い声」は「私」にこう語りかける。

Thou art so full of misery,

Were it not better not to be?

(2—3)

(お前は悲歎にくれている。死んだ方がいいのではないか。)

因みに “a still small voice” という句は聖書の「列王紀上」第19章12節にある有名な句であり、通常、神または良心の声という意味で用いられる。牧師の家に生まれたテニスが出所を知らぬ筈がない。神または良心の声は抗しがたい強制力をもつ。これを自殺をすすめるメフィストテレスの声として第一行目に置いたところに、テニスの慎重な用意をみるべきであらう。自殺への誘惑は容易に斥けがたいものなのだ。この惑わしの声に「私」は

‘Let me not cast in endless shade

What is so wonderfully made.’

(5—6)

(無限の闇に、作り巧みなこの肉体を葬らせないで呉れ。)

と頼むのだが、細い声はとんぼでも、その姿驚嘆すべき生物ではないか、自然界には人間よりも絶妙な姿を具えた生物が幾らでも居るのだ、と一蹴する。

「私」は更に言う「天地が創まつたとき、若い自然は五周期を経て、六周期目に人間を造つた。自然は人間に、心と、威厳この上なき体の釣合と、とりわけ他に秀れた頭脳と心情とをあたれた」と。これに対して細い声は地球以外の世界にも人間を遙かに凌ぐ生物が居るに違いないのだ、と答える(16—30)。

「私」自身の individuality は、かけがえのない尊いものだ——そんなものはこの無限の世界では何の値打もないものだ、お前が死んだからとて、誰一人それを気に病むものはあるまい(31—45)。お前の精神的苦悩は深刻だ——しかし時が変化をもたらして呉れるかも知れぬ——いや、そのような病をいやす術はない、自殺あるのみだ(46—57)。もし「死ねば自然の美観も、知識の進歩も取逃がすことになるう——お前は何れにせよ、そのうちに、それらのものを失わねばならない(58—72)。しかし、たとい僅かであつても、知識の進歩はそれだけの価値のあるものであり、生き存らえれば私は、それを目のあたりに見ることもできるのだ——だが、永劫の時に比べれば人智の歩みなどは……

Forerun thy peers, thy time, and let
Thy feet, milleniums hence, be set
In midst of knowledge, dream'd not yet.

Thou hast not gain'd a real height,
Nor art thou nearer to the light,
Because the scale is infinite.

'Twere better not to breathe or speak,
Than cry for strength, remaining weak,
And seem to find, but still to seek.

(88—96)

（お前の朋輩に、お前の時代に先んぜよ。そして両足を、幾千年の先に、いまだ夢想だにされぬ知識のただ中に据えよ。それでも、お前は真の高みに達しないのだ。光により近付きはしないのだ。何故なら、梯子は果しくなく続くのだから。力弱く止まりながら、力を泣き求め、見出さんかに見えて、止むことなく求めるよりは、息もせず口もきかぬ方がましであろう。）

この引用は悪魔の口から発せられた唯物論的敗北主義（Materialistic defeatism）とも称すべきものである。

テニスン自身は、元来、知識、特に科学的知識について隠健な考えを持つておりその進歩に仲々敏感であつたことはよく知られている事実である。Hallamを失つた1833年 Somersby における冬の日課を覗いてみると、ドイツ哲学の研究（Coleridge の影響であろう）と並んで、化学、植物学、動物生理学、地質学、電気学、機械学などの科学を独習したことが記されている。勿論、知識人の余技としての勉強であつたろうが、当時としては珍らしいことだつたと思われる。しかし、テニスンは知識のための知識、即ち何ら ‘moral purpose’ を伴わない知識には危惧の念を抱き、これを叡智（‘wisdom’）と区別した。

In Memoriam 第114節で「すべての知識がもしも虚しいものでないならば、より高き叡智の手よ、それを和らげ、行手をみちびき、幼子を連れるが如く、足並を合せて伴い行けよ。なぜなら知識は地上の心、叡智は天上の霊であるから」（入江直祐氏訳）と歌っている。

ところで、対話はなおも続く。私が自殺によつて、自分の持場を棄てれば人々は私を見下げ果てた奴だと言うであろう——他人のことばを怖れて、お前はあの惨めな状態を引延ばそうとするのか。死ねばお前は忘れられ、人のことばなど耳に入らぬではないか（100—117）。私には苦痛からの解放という消極的動機以外に、自殺の動機を見出し得ないのだ。曾て人々の賞讃にあこがれていた頃は、一つの望みがあつた。それは、これからも取戻すことができるかも知れない願ひなのだ。

At least, not rotting like a weed,

But, having sown some generous seed,

Fruitful of further thought and deed,

To pass, when Life her light withdraws,

Not void of righteous self-applause,

Nor in a merely selfish cause—

In some good cause, not in mine own,

To perish, wept for, honour'd, known.

(142—149)

(少なくとも雑草のように腐るのでなく、更に思想と行為とを生む実り豊かな種子をまき、生がその光を消すとき、単に利己的な主義主張のためでなく、自分のでない何か立派な主義のために尽し、当然の心の満足を得て、人に惜まれ名誉を得、名を成して、この世を去りたい。)

この辺りは、1832年までの詩集に対する批評家たちの酷評にもめげず、詩人としての使命に徹しようとしていた青年テニソンの意気込みを述べたものであろう。が今やその望みも失せた。しかし、生きていれば、も一度この情熱を取戻すことができるかも知れぬ、と反省するのであるが、誘惑の声はそれは「若き日の血のたぎり」、青春の空しい夢にすぎぬ、お前を待つはただ「阻害であり、転変であり、破滅」(“the check, the change, the fall”)であつて、苦しみが起り、古き喜びは色あせ、お前のような夢が、人間の精神に関わりのある真理を見出そうとしても、

If straight thy track, or if oblique,

Thou know'st not. Shadows thou dost strike,

Embracing cloud, Ixion-like;

(193—195)

(行く道が真直か、曲つているかも、お前にはわからないのだ。お前はイクサイオンのように雲を抱いて、影を打つばかりだ)

と努力精進の空しさを、しきりに説くのである。

これまでに紹介した対話で大体見当のつくことであるが「私」というのは結局、自殺に引きずり込もうとする私という人格中にひそむ、弱い方の否定的な自己に対して、強い方の自己すなわち、肯定的な自己を指すものと解してよいであろう。そして精神分裂によつて生じたこの二つの自己が、私の中で相争っているのである。肯定的自己はこの場合「生きんとする意志」と名付けてもよい。それは本来半ば盲目的なものである。しかし一打撃によつて根底まで揺らいでしまつた生への意志は、否応なしに自己意識を強いられる。そして専ら感情に訴えて「一切の救いはただ一つあるのみ」と呪文のように繰返して自殺へとかり立てる否定的自己に対して、理性によつて自己を正当化しようと試みるのである。

この辺りから議論は地上の生を離れて、死後の生、この詩の中心テーマである靈魂不滅の問題に入つてゆく。生きんとする意志を代表する「私」はことばを続けて

I toil beneath the curse,
But, knowing not the universe,
I fear to slide from bad to worse.

(229—231)

(私はたたariを受けている身だ、だが、宇宙を知らぬまゝに、〔自殺によつて〕更に悪い状態に陥ることを怖れる。)

と言うのであるが、「たたari」とは聖書に記されている、樂園を追われた人間が忍ばねばならぬ宿命を指すものであろうし、次の二行は Hamlet のいわゆる「死後の或る不安」(‘the dread of something after death’) におののく心を述べたものであろう。こうした躊躇に対して、「声」はテニソンの母音駆使の技巧の冴えをよく示す極めて魅惑的な調子で、次のように死者の安らぎを描くのである。

High up the vapours fold and swim:
About him broods the twilight dim;
The place he knew forgetteth him.

(262—264)

(高き所には霞がただよい、流れる。彼のあたりは、おぼろげな薄明が立ちこめる。彼の知っていた場所は、彼を忘れる。)

「私」としても感覚的には死の神が万物を領することを知らぬではない。しかし感覚の教えるこの明白なる事実が、死が総ての終りであることを確信せしめないのは、何故か。感覚の教えるところに疑をさしはさませる、あの他の働き、あの強烈な靈的証拠(“that heat of inward evidence”)は、一体誰が作ったものなのか、と挑みかゝる。「地上で人間は飛ばんがための翼を用意しているのだ。彼の心は一つの神秘を予感する。彼はそれを名付けて、永遠の生(‘Eternity’)と呼ぶ。心の中の理想の典型を、彼は自然のどこにも見出すことはできない。彼はあらゆる風に自らを播きつける。彼は天上なる友〔=神〕のことばを聞き、厚いヴェールを通して、一つの目的に向う働きを把握するように思う」と「私」は言う。自分の雄弁に力を得て、自己主張のためには輪回(metempsychosis)の思想までも引き合いに出す。しかし靈魂の問題などは、悪魔の関り知らぬところ、生とは要するに

A life of nothings, nothing-worth,
From that first nothing ere his birth
To that last nothing under earth!

(328—330)

(何の価値もない、よしなし事の一生、生まれる前のあの最初の無から、地下のあの最後の無に至るまで!)
と嘲つて取合わないのである。

遂に「生きんとする意志」は論証をあきらめて、次のように啖呵を切つてみせる。

Whatever crazy sorrow saith,
No life that breathes with human breath
Has ever truly long'd for death.

'Tis life, whereof our nerves are scant,
Oh life, not death, for which we pant;
More life, and fuller, that I want.

(394—399)

(狂おしい悲しみが何と言おうと、人間の息して生きるいかなる生も、真に死を願つたためしはないのだ。乏しいながら我々にあたえられた生なのだ、死でなくて、あゝ生なのだ、我々が渴望するのは。私が欲するのは、更に多くの更に豊かな生なのだ。)

これは半ば絶叫調である。しかし、このような感情論が一たん懷疑のむしろむところとなつた生きんとする意志を励ますのに、いかに無力であるかは「私」自身がよくよく承知しているのである。故に、この絶叫に続く一行は、心理的にみて、極めて適切である。曰く、「私は言うをやめて、見放された者のごとく坐つた」(400)。これは懷疑に対する信仰の敗北を暗示する。

もし、こゝでこの詩が終つていたならば、内容的には現代の我々の趣味にふさわしいものとなつたであろう。だが、実は、終結の部として、これからあと60行あまり続くのである。Harold Nicolson が以下は 'bathos' であり、この詩のためにはなくもがなだと言つているのは、現代の読者の好みを代表するものかも知れない。⁽⁴⁾ また Chesterton の「彼(テニスン)は短く表現するとき、最も優れていた。長詩においては、彼は自分の言わんとしたことと殆んど反対のことを、結局言つてしまう癖があつた」⁽⁵⁾ という評言も考え合される。何れも傾聴すべき見解ではあるが、テニスン自身としては、この最後の部分が言いたいところであつたろうし、これを、無意識的にせよ、彼の時代に対する message と考えていたのであろう。当時の読者も、この message を読んで、ほつとしたにちがいない。「二つの声」のうちもう一つの声は、これまで紹介した部分にはまだ出て来ないのである。statement としては、まだ半分きり済んでいないのである。

では何故、462行の詩の400行を内部葛藤の有様を描くのに使つてしまつたか。statement としては、成程、最後の部分においてその前の内容を転倒さ

せることはできよう。そして、その逆転を、詩人はこれからやつてみせるわけであるが、時すでに遅しの感はないか。

さて、終結の部分で「私」は議論に倦み疲れて力なく坐っている。これを見て、例の声は勝利を意識して嘲笑つて「見ろ、安息日の朝だ」と言う。「私」が窓を明けると、教会の鐘が鳴り響く。人々は教会へとつめかける。人みながやがて憩わねばならない所（＝墓地）を通り抜け、喜び迎えらるる客人のようにみな教会へ入つてゆく。（この描写は死の境をさまよう「私」を動かさずには居かない情景であろう。）とりわけ目にとまつたのは、一組の家族連れである。

One walk'd between his wife and child,
With measured footfall firm and mild,
And now and then he gravely smiled.

The prudent partner of his blood
Lean'd on him, faithful, gentle, good,
Wearing the rose of womanhood.

And in their double love secure,
The little maiden walk'd demure,
Pacing with downward eyelids pure.

(412—420)

（妻と子供を両脇にして、しつかりとゆつくり歩調を整えて、一人の男が歩いていた。そして時折彼は謹厳な微笑をみせた。分別ある、その妻は、誠実で、気立優しく、善良そうで、女らしきのバラの花を身に着けて、夫にすぎるようであつた。そして両親の愛情に心安んじて、小さな娘は慎ましげに、伏目がちに歩いていた。）

ここに引用した三節はいかにもヴィクトリア朝的家庭風景である。家庭のなごやかさを描いたものであるが、あまりに意識的ではあるまいか。我々が今日、テニスンを読むとき、一時反撥を覚えるのは、まさにこうした個所なのである。

400行にもわたつて描かれた魂の苦悩が、このようなセンチメンタルな外部事情によつて解消するとは何事であるか、これでは偽善的中産階級道德との妥協ではないか、と抗議したくなるのも無理からぬことであろう。しかし、よく考えると、この部分だけを取り出して妥協とか仰合とか論ずるのは間違いである。

Basil Willey が述べているように「このような心の中での議論は純理論的論証や確信に終ることは有り得ないのである。それは気分や場面の転換、良好な健康状態や、元気、物事の真の釣合に対する一新した認識などによつてのみ、⁽⁶⁾脱せられ、取つて代えられるものなのである。」だから、テニスンがこうした情景を持出して、自殺への誘惑を制し得ないでいる魂の救いのきつかけとしたのは、心理的には洞察に富む趣向と云うべきであろう。そして、1833年頃、日曜の朝、教会へ出かける幸福な家族という図は、今日の我々が想像するように必ずしも本質的に馬鹿げたシンボルではなかつたことも認めるべきである。

Coleridge の老水夫が、海蛇を祝福することによつて図らずも呪文を解いたように、「私」は思わずこの幸福な家庭連れを祝福する、と一晚中彼を苦しめていた「例の鈍い苦々しい声」は、消え失せてしまう。その代り、耳もとでささやくのは、銀鈴のような新たな声、それは「心安かれ」と彼を慰め、風琴のような暗示に富む声で「語る能わざることを、われ知る」と。

‘What is it thou knowest, sweet voice?’ I cried.

‘A hidden hope’, the voice replied :

So heavenly-toned, that in that hour
From out my sullen heart a power
Broke, like the rainbow from the shower,

To feel, altho’ no tongue can prove,
That every cloud, that spreads above
And veileth love, itself is love.

(440-448)

（「妙なる声よ、汝が知つていることは何か」と私は叫んだ。声は答えて「ひそかなる望み」と。それは、まさに天来の響きをもつた声であつたので、その時、私の陰うつな心から、夕立から虹が現われるように、一つの力が湧き起りことばでは証明できないけれど、高きにひろがり愛を隠すあらゆる雲は、それ自体愛なのだ、と感じた。）

こゝに、この思索詩の結論があり、テニスンが一生到達しようと努力した信仰の帰結「神は愛なり」(God is Love)の思想が歌われていると考えてよいであろう。テニスンはあくまで詩人であり、組織立つた哲学者でも神学者でもなかつたから、自ら信仰体系を編み出すことはなかつた。そして表面的には、当時の支配的な宗教観を受け入れていたかに見えるが、彼の信仰は、今日誤り伝えられるように、Mammon と並べてキリストをあがめるといつた、自己満足的なヴィクトリア朝中産階級の、御都合主義の宗教観と同列に論ぜらるべきものでないことは言うまでもない。彼は「ひそかなる望み」に辿りつくまでに462行のうち400行を煩悶に費さなければならなかつたのである。

実際、今日、無信仰の我々がこの詩を読んで打たれるのは、テニスンの信仰の命題そのものではない。むしろ、これに至るまでの過程における懷疑である。ヴィクトリア朝知識人の多くが直面しなければならなかつた思想上の大問題は、科学と宗教とをいかに調和させるかであつた。テニスンはリベラルな考を持つ思想家の一人として科学的な思考を決して排斥しなかつた。しかし彼には T. H. Huxley (1825—95) のように純粹に合理的になり、その結果不可知論者にもなれなかつた。氣質的には 'mystic' などころが多分にあつたが、一度科学的思考の洗礼を受けた者として、これにも徹し切れなかつた。（ただし、この傾向は彼の詩の随所に現われている。）このようなジレンマの中にあつて彼のとつた道は要するに「疑う」ことであつた。In Memoriam の中で彼は「いいかげんな念仏よりも、真剣な懷疑の中に、より深い信仰が生きているものと思いたまえ」と言っている。更に

I stretch lame hands of faith, and grope,
And gather dust and chaff, and call

To what I feel is Lord of all,
And faintly trust the larger hope.

(*In Memoriam* MX)

(私は信仰のしなえた手をのばして探り、塵ともみがらを掴む。万物の主と思うものに声をあげて呼び求め、大いなる希望をわずかに頼る。)

と歌い、また「神を信ずることは骨の折れることであるが、信じないことは更に骨の折れることである⁽⁷⁾」と言つて人間的弱さを示している。

こうしたテニソンの態度を、*Chesterton* 流に、ヴィクトリア朝の妥協 (*Victorian compromise*) と冷笑することは勝手であるが、このことばで一切を片附けるのは粗雑すぎる見解であろう。テニソンが国民詩人として同時代人にあれだけ広く読まれたのは、詩的技巧の卓越していたばかりではなく、確かに彼が暗中摸索して達し得た信仰の帰結に、満足を示した証拠である。不幸にして取返しのつかないほど神を失ってしまった二十世紀の我々は、そういう意味での共感を覚えることはできない。ただ *T. S. Eliot* は、*In Memoriam* を評して「その信仰はつまらないものだが、その懷疑は極めて強烈な経験である⁽⁸⁾」言っているが、この意味では、テニソンは今日の読者を引きつける力をなお十分に持っている。私がいまだ知られていない、初期の作 '*The Two Voices*' を取上げてみたのも、この詩に早くも、時代の重荷に悩むテニソンの真摯な姿が窺えると考えたからに外ならない。

一註一

- (1) Shannon, E. F. ; *Tennyson and the Reviewers*, P.57
- (2) Tennyson, Charles : *Alfred Tennyson*, P.145
- (3) Nicolson, Harold : *Tennyson*, P.130
- (4) *ibid.*, P.127
- (5) Chesterton, G. K. : *Victorian Age in Literature*, P.102
- (6) Willey, Basil : *More Nineteenth Century Studies*, P.68
- (7) Nicolson, Harold : *Tennyson*, P.269
- (8) Eliot, T. S. ; *Tennyson's 'In Memoriam'*